代数系まとめ 代数系の定義と『いつもの』

@men_cotton

2024年1月29日

定義と例

1 モノイド

1.1 モノイドの定義

3-tuple (M, \cdot, e) (ただし、 $: M \times M \to M, e \in M$) であって、以下の条件を満たすもの。

- 結合法則
- 単位元の性質

2 群

2.1 群の定義 [1-p.20 2.1.1]

3-tuple (G,\cdot,e) (ただし、 $:G\times G\to G,\,e\in G)$ であって、以下の条件を満たすもの。

- (G, \cdot, e) はモノイド
- 逆元が任意の元に存在

2.2 群の例

2.2.1 環の加法は可換群 [1-p.21 2.1.4]

例: $\mathbb{Z}, \mathbb{Q}, \mathbb{R}, \mathbb{C}$

環 $(R,+,\cdot,0_R,1_R)$ に対し、 $(R,+,0_R)$ は可換群。

2.2.2 **乗法群** [1-p.21 2.1.5], [1-p.25 2.1.13]

例: $\mathbb{Q} \setminus \{0\}, \mathbb{R} \setminus \{0\}, \mathbb{C} \setminus \{0\}, \mathrm{GL}_n(\mathbb{C})$

環 $(R,+,\cdot,0_R,1_R)$ に対し、可逆元(単元)全体の集合 R^{\times} は、乗法に関して群となる。この $(R^{\times},\cdot,1_R)$ を乗法群 という。

2.2.3 n 次対称群 [1-p.24 2.1.11]

n 次の置換全体からなる群 \mathfrak{S}_n

2.3 モノイドであって群ではない例

2.3.1 (Z,·,1) は群でない [1-p.21 2.1.5]

逆元が必ずしも存在しないから。例えば、2n=1となる $n\in\mathbb{Z}$ がない。

2.3.2 ({0,1}, min, 1) は群でない [1-p.68 演習 2.1.1]

逆元が必ずしも存在しないから。例えば、 $\min(x,0)=1$ となる $x\in\{0,1\}$ がない。

2.3.3 $(\mathbb{R}, (a,b) \mapsto a+b+ab, 0)$ は群でない [1-p.68 演習 2.1.2]

逆元が必ずしも存在しないから。例えば、-1+b+(-1)b=0となる $b \in \mathbb{R}$ がない。

3 環

3.1 環の定義 [1-p.25 2.2.1]

5-tuple $(R, +, \cdot, 0_R, 1_R)$ (ただし、 $+, \cdot: R \times R \to R$, $0_R, 1_R \in R$) であって、以下の条件を満たすもの。

- (R,+,0_R) は可換群
- $(R,\cdot,1_R)$ はモノイド
- 分配法則

3.2 環の例 [1-p.27 2.2.4], [2-p.5 1.2.1]

 $\mathbb{Z}, \mathbb{Q}, \mathbb{R}, \mathbb{C}$

 $\mathbb{C}[x]$ (変数が x の複素係数多項式)

3.3 環であって可換環でない例 [1-p.27 2.2.4], [2-p.3 1.1.6]

 $M_{n\geq 2}(\mathbb{R})$ (実数成分の正方行列)

Ⅲ (4 元数環、4 元数体)

4 整域

4.1 整域の定義 [2-p.6 1.2.5(1)]

 $\forall a \in R \setminus \{0\}, \forall b \in R \setminus \{0\}, ab \neq 0$ を満たす可換環 R

4.2 可換環であって整域でない例 [2-p.6 1.2.7]

 $\mathbb{Z}/4\mathbb{Z} \quad (\because 2 \cdot 2 \equiv 0 \pmod{4})$

 $\mathbb{C}[x]/(x^2)(\because x \cdot x \equiv 0 \pmod{x^2})$ (dual number の環という)

5 体

5.1 体の定義

- 0 で割る以外の除算ができる可換環 [1-p.27 2.2.5]
- 非自明なイデアルを持たない可換環 [2-p.21 1.3.34]

5.2 **体の例** [1-p.27 2.2.7]

 $\mathbb{Q}, \mathbb{R}, \mathbb{C}$

5.3 任意の体は整域 [2-p.6 1.2.6]

 $\forall a \in R \setminus \{0\}, ab = 0 \ \texttt{L} \, \texttt{J} \, \texttt{S}_{\circ}$

 $ab=0 \implies a^{-1}ab=a^{-1}0 \implies b=0$ の成立より、 $a\in R\setminus\{0\}, b\in R\setminus\{0\}, ab=0$ なる a,b はない。

5.4 整域であって体でない例 [1-p.27 2.2.6]

 \mathbb{Z} $(:: 0 \neq 1$ かつ $2 \neq 0$ なのに、 $1/2 \notin \mathbb{Z}$)

6 環上の加群・線形空間

6.1 体 K 上の線形空間の定義 [2-p.92 2.3.1]

4-tuple $(V,+,\cdot,0_V)$ (ただし、+: $V\times V\to V$, ·: $K\times V\to V$, $0_V\in V$) であって、以下の条件を満たすもの。

- (V,+,0_V) が可換群
- $(\lambda \mu)v = \lambda(\mu v)$
- $1_K v = v$
- $(\lambda + \mu)v = \lambda v + \mu v$
- $\lambda(v+u) = \lambda v + \lambda u$

条件 2,3 は群の作用に対応している(体 K の V への作用)。 条件 4.5 は分配法則に対応している。

6.1.1 左 R 加群の定義

R が可換環の場合 (特に体)、左でも右でも同じ。

6.2 環上の加群・線形空間の例

6.2.1 \mathbb{Z} 加群 [2-p.93 2.3.3] $2\mathbb{Z}, \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ は、 \mathbb{Z} 加群である。

6.2.2 ℂ[x] 加群

 \mathbb{C}^n は、 $\mathbb{C}[x]$ 加群である。ただし、 $A \in \mathcal{M}_n(\mathbb{C})$ で、

$$: \mathbb{C}[x] \times C^n \to C^n, (f(x), v) \mapsto f(A)v$$

である。

6.2.3 微分方程式の解空間

- f(x), g(x) が解ならば f(x) + g(x) も解である(加法について閉じている)
- f(x) が解ならば $a \cdot f(x) (a \in \mathbb{R})$ も解である(実数倍について閉じている)

を満たすなら、その微分方程式の解の集合は、 $\mathbb R$ 上の線形空間である。

6.2.4 体の準同型写像(特に、包含写像)[2-p.93 2.3.4(1)] $au\colon \mathbb{F} \to \mathbb{F}'$ を用いて、 $\cdot\colon \mathbb{F} \times \mathbb{F}' \to \mathbb{F}', (f,f') \mapsto au(f)f'$ とする。これによって \mathbb{F}' は \mathbb{F} 上の線形空間となる。

【確認】 $(\mathbb{F}',+,0)$ は(体の加法なので)可換群である。 また、

を満たす。

式変形に関して

1 単位元の一意性 [1-p.23 2.1.10(1)]

モノイドにおいて、 $e = e \cdot e' = e'$

2 逆元の一意性 [1-p.23 2.1.10(2)]

群において、 $b = b \cdot e = b \cdot (a \cdot b') = (b \cdot a) \cdot b' = e \cdot b' = b'$

- 3 $(a^{-1})^{-1}=a$ [1-p.23 2.1.10(4)] $a\cdot a^{-1}=0=a^{-1}\cdot a$ を、 a^{-1} を主体に考える
- 4 a((bc)d)=(ab)(cd) [1-p.22 2.1.7] 結合法則より、カッコは要らない。
- 5 $ab=ac \implies b=c$ [1-p.22 2.1.8(1)] 両辺に左から a^{-1} をかける。
- 6 $ab = c \implies b = a^{-1}c, \ a = cb^{-1}$ [1-p.22 2.1.8(2)]

両辺に左から a^{-1} や b^{-1} をかける。

7
$$(ab)^{-1} = b^{-1}a^{-1}$$
 [1-p.23 2.1.10(3)]
 $(ab)(b^{-1}a^{-1}) = e = (b^{-1}a^{-1})(ab)$

部分代数系

1 部分代数系の定義 [1-p.29 2.3.1, 2.3.2]

「部分集合・演算の制限写像・単位元」であって、もとの 構造を保っているもの。

制限写像であるから、演算が閉じていることを確認すればよい(すなわち、積・和・invについて閉じているか)。

2 部分代数系の例

2.1 環

 $\mathbb{Z} \subset \mathbb{Q} \subset \mathbb{R} \subset \mathbb{C} \subset \mathbb{C}[x]$

2.2 **可換群** [1-p.56 2.8.2] gH = Hg を満たすため、必ず正規部分群である。

3 部分代数系 $H \subseteq G$ でも逆元は同じ [1-p.29 2.3.2(3)]

 $\forall x \in H, \exists y \in H, yx = e_H = xy$ 。 演算は制限写像であったから、 $yx = e_G = xy$ でもある。

準同型·同型

1 群準同型写像の定義 [1-p.40 2.5.1(1)]

写像 $\varphi: G_1 \to G_2$ であって、以下の条件を満たすもの。

1. $\varphi(gg') = \varphi(g)\varphi(g')$

2 群準同型写像は以下を満たす

2.1
$$\varphi(e_1) = e_2$$
 [1-p.41 2.5.3(1)]
$$\varphi(e_1) = \varphi(e_1e_1) = \varphi(e_1)\varphi(e_1)$$

2.2
$$\varphi(g^{-1}) = \varphi(g)^{-1}$$
 [1-p.41 2.5.3(2)]
$$\varphi(g)\varphi(g^{-1}) = \varphi(gg^{-1}) = \varphi(e_1) = e_2$$

3 モノイド準同型写像の定義

写像 $\varphi: S \to T$ であって、以下の条件を満たすもの。

1. $\varphi(xy) = \varphi(x)\varphi(y)$

2. $\varphi(1_S) = 1_T$

3.1 条件 2 は必要

 $\varphi: \mathbb{Z} \to \mathbb{Z}, x \mapsto 0$ は条件 1 を満たすが、2 を満たさない。

4 恒等写像は準同型 [1-p.41 2.5.4]

- id(xy) = xy = id(x)id(y)
- id(e) = e

5 準同型写像の合成は準同型 [1-p.43 2.5.11(1)]

- $g \circ f(xy) = g(f(x) \cdot f(y)) = g \circ f(x) \cdot g \circ f(y)$
- $g \circ f(e_R) = g(e_S) = e_T$

6 同型写像の定義 [1-p.40 2.5.1(2)]

準同型写像 $\varphi\colon G_1\to G_2$ であって、以下の条件を満たすもの。

 $\exists \varphi' \colon G_2 \to G_1, \varphi' \circ \varphi = \mathrm{id}_{G_1}$ かつ $\varphi \circ \varphi' = \mathrm{id}_{G_2}$

7 準同型写像が全単射なら同型 [1-p.41 2.5.2]

写像 $f\colon R\to S$ が全射かつ単射であるとき、逆写像をもつ。なぜなら、

- 全射より、 $\forall x \in S, f^{-1}(\{x\}) \neq \emptyset$
- 単射より、 $\forall x \in S, |f^{-1}(\{x\})| \leq 1$

であるため、 $x \in S$ と $f^{-1}(x) \in T$ との間に 1 対 1 対応があるからである。

逆写像 $g \coloneqq f^{-1}$ が準同型写像であることを示す。

$$g(xy) = g(f \circ g(x) \cdot f \circ g(y))$$

$$= g(f(g(x) \cdot g(y)))$$

$$= g \circ f(g(x) \cdot g(y))$$

$$= g(x) \cdot g(y)$$

$$g(e) = e$$

8 同型は「同値関係」

- ●「反射律」: id は準同型であり、id o id = id より、 $R \simeq R$
- ●「対称律」:

$$R \simeq S$$

 $\Longrightarrow \exists \varphi \colon R \to S, \exists \varphi' \colon S \to R$
 $\varphi' \circ \varphi = \mathrm{id}_R$ かつ $\varphi \circ \varphi' = \mathrm{id}_S$
 $\Longrightarrow S \simeq R \quad (\varphi' を主体にみる)$

●「推移律」:

9 自己同型写像は合成に関して群をなす(自己 同型群 Aut*G*) [1-p.45 2.5.16]

- 閉じている:自己同型写像 $\varphi, \psi \colon G \to G$ に対し、 $\psi \circ \varphi$ は逆写像として $\varphi^{-1} \circ \psi^{-1}$ をもつ。これは準同型。
- 結合法則:写像の結合法則による
- 単位元:id_C
- ullet 逆元:同型写像の定義より、arphi が同型なら $arphi^{-1}$ も同型。

核 Ker・像 Im

- 1 可換環の準同型写像 $f: R \rightarrow R'$
- 1.1 Im *f* は *R'* の部分環 [2-p.14 1.3.10 の後] 加法が部分可換群
 - $f(x) + f(y) = f(x+y) \in \operatorname{Im} f$

乗法が部分モノイド

- $f(x) \cdot f(y) = f(x \cdot y) \in \operatorname{Im} f$
- $1_{R'} = f(1) \in \operatorname{Im} f$
- 1.2 Ker f は R のイデアル [2-p.18 1.3.24]
- 2 群の準同型写像 $f: G \rightarrow G'$
- 2.1 Im f は G' の部分群 [1-p.41 2.5.3(3)]
 - $f(x) \cdot f(y) = f(x \cdot y) \in \operatorname{Im} f$
- 2.2 Ker f は G の正規部分群 [1-p.56 2.8.3] $h \in \operatorname{Ker} f$ として、

 $g' \in g(\operatorname{Ker} f) \iff \exists h, g' = gh \iff \exists h, f(g') = f(g)f(h) \iff \exists h, f(g') = f(h)f(g) \iff \cdots \iff g' \in (\operatorname{Ker} f)g$

- 3 R 加群の R 準同型写像 $f:V \to W$
- 3.1 Im f は W の R 部分加群 [2-p.150 演習 2.4.2]

2.1 より、加法に関して部分群である。

また、f の準同型性より rf(x)=f(rx) であり、作用に関して閉じている。

 $3.2 \quad \mathrm{Ker}\, f$ は V の R 部分加群 [2-p.150 演習 2.4.2]

2.2 より、加法に関して部分群である。

また、f の準同型性より $f(x)=0 \implies f(rx)=rf(x)=0$ であり、作用に関して閉じている。

- 4 $f: G_1 \rightarrow G_2$ が準同型のとき、f が単射 \iff $\operatorname{Ker} f = \{e_1\}$ [1-p.44 2.5.13]
- 4.1 *⇒*

準同型なので、 $f(e_1) = e_2$ 。単射性より、 $Ker f = \{e_1\}$ 。

4.2 ←

対偶を示す。

$$g \neq g' \Rightarrow f(g) = f(g')$$

$$\implies g \neq g' \Rightarrow f(g)f(g^{-1}) = f(g')f(g^{-1})$$

$$\implies g \neq g' \Rightarrow e_2 = f(g'g^{-1})$$

$$\implies \operatorname{Ker} f \neq e_1$$

商

1 同値類の性質

 $1.1 \quad y \in [x] \implies [y] = [x] \text{ [1-p.48 2.6.8(2)]}$ $z \in [y] \iff z \sim y, \quad z \in [x] \iff z \sim x$ である。ここで、

$$z \sim y \implies z \sim y \text{ find } y \sim x \quad (\because y \in [x])$$

$$\implies z \sim x$$

$$z \sim x \implies z \sim x \text{ find } x \sim y \quad (\because y \in [x])$$

$$\implies z \sim y$$

より、 $z \sim y \iff z \sim x$ であり、[y] = [x] である。

1.2 $[x] \cap [y] \neq \emptyset \implies [x] = [y]$ [1-p.48 2.6.8(3)]

$$\begin{split} [x] \cap [y] \neq \emptyset &\implies \exists z, z \in [x] \text{ かつ } z \in [y] \\ &\implies \exists z, [x] = [z] \text{ かつ } [y] = [z] \\ &\implies [x] = [y] \end{split}$$

- 2 部分群 $H \subseteq G$ に対し $g \sim g' \iff g^{-1}g' \in H$ は同値関係 [1-p.48 2.6.6]
- 2.1 例
 - 可換環 R、(両側) イデアル I に対し、 $-r'+r \in I$
 - 可換群 G、正規部分群 N に対し、 $g^{-1}g' \in N$
 - R 加群 V、R 部分加群 W に対し、 $-v'+v \in W$
- 2.2 証明
 - 反射律: $x^{-1}x = e \in H$ より、 $x \sim x$
 - 対称律:

$$x \sim y \implies x^{-1}y \in H \implies (x^{-1}y)^{-1} \in H$$

 $\implies y^{-1}x \in H \implies y \sim x$

• 推移律:

$$x \sim y$$
 かつ $y \sim z \implies x^{-1}y \in H$ かつ $y^{-1}z \in H$
$$\implies (x^{-1}y)(y^{-1}z) \in H$$

$$\implies x^{-1}z \in H \implies x \sim z$$

- 3 **群の同値類は** C_a は、gH [1-p.52 2.6.17]
- 3.1 証明

$$g' \in C_g \iff g \sim g' \iff g' \sim g \iff g'^{-1}g \in H$$

$$\iff \exists h \in H, g'^{-1}g = h$$

$$\iff \exists h \in H, g' = gh^{-1}$$

$$\iff \exists \tilde{h} \in H, g' = g\tilde{h} \quad (\tilde{h} = h^{-1}, h = \tilde{h}^{-1})$$

$$\iff g' \in gH$$

- 3.2 系
 - 可換環 $r \pmod{I} = r + I$
 - 可換群 $C_q = gN = Ng$
 - R 加群 $v \pmod{I} = v + W$

4 商集合 X/\sim の普遍性

任意の集合 Z と任意の写像 $f: X \to Z$ について、

$$\forall x_1, x_2 \in X, x_1 \sim x_2 \implies f(x_1) = f(x_2)$$

ならば, $f=\overline{f}\circ p$ となるただ 1 つの写像 $\overline{f}\colon X/\!\!\sim \to Z$ が存在する。



4.1 証明

図式が可換になるようにするには、 $\forall x \in X, \overline{f}([x]) = f(x)$ でなければならないから、存在すればただ一つ。

 $[x] = [x'] \implies x \sim x' \implies f(x) = f(x')$ より、これは well-defined。

4.2 系

4.2.1 **商環の普遍性(イデアル** *I* による同値関係) [2-p.27 1.4.6]

任意の可換環 Z と任意の環準同型写像 $f: R \to Z$ について,

$$\forall r_1, r_2 \in R, r_1 \equiv r_2 \pmod{I} \implies f(r_1) = f(r_2)$$

ならば, $f = \overline{f} \circ p$ となるただ 1 つの環準同型写像 $\overline{f} \colon R/I \to Z$ が存在する。

4.2.2 **商群の普遍性(正規部分群** N による同値関係) [1-p.66 2.10.5]

任意の群 Z と任意の<mark>群準同型</mark>写像 $\varphi: G \to Z$ について,

$$\forall g_1, g_2 \in G, g_1 \sim g_2 \implies \varphi(g_1) = \varphi(g_2)$$

ならば, $\varphi = \overline{\varphi} \circ \pi$ となるただ 1 つの<mark>群準同型</mark>写像 $\overline{\varphi} \colon G/N \to Z$ が存在する。

4.2.3 商R加群の普遍性 (R部分加群Wによる同値関係)

任意の ${\bf R}$ 加群 ${\bf Z}$ と任意の ${\bf R}$ 準同型写像 $f\colon V\to {\bf Z}$ について、

$$\forall v_1, v_2 \in V, v_1 \equiv v_2 \pmod{W} \implies f(v_1) = f(v_2)$$

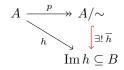
ならば、 $f = \overline{f} \circ p$ となるただ 1 つの \mathbf{R} 準同型写像 $\overline{f} \colon V/W \to Z$ が存在する。

5 商集合の準同型定理

集合 A, B と写像 $h: A \rightarrow B$ について,

$$a_1 \sim_h a_2 \stackrel{\text{def}}{\iff} h(a_1) = h(a_2)$$

と定める。このとき、 $h=\overline{h}\circ p$ なる \overline{h} は単射である。 ゆえに、 $\overline{h}\colon A/{\sim}\to {\rm Im}\, h$ は全単射。



5.1 証明

普遍性より、 $\overline{h}([a]) = h(a)$ 。

 $\overline{h}([a]) = \overline{h}([a']) \implies h(a) = h(a') \Longrightarrow a \sim_h a' \Longrightarrow$ [a] = [a'] より、単射である (well-defined のときの議論を逆に辿れる)。

5.2 系(「準同型写像が全単射 ⇒ 同型」が有用)

5.2.1 可換環の準同型定理 [2-p.25 1.4.3]

 \overline{f} : $R/\operatorname{Ker} f \to R'$ は単射であり、 $R/\operatorname{Ker} f \simeq \operatorname{Im} f$ (Ker f は R のイデアルであった)

5.2.2 群の準同型定理 [1-p.63 2.10.1]

 $\overline{f} \colon G/\operatorname{Ker} f \to G'$ は単射であり、 $G/\operatorname{Ker} f \simeq \operatorname{Im} f$ (Ker f は G の正規部分群であった)

5.2.3 R 加群の準同型定理 [2-p.101 2.4.19(1)]

 \overline{f} : $V/\operatorname{Ker} f \to W$ は単射であり、 $V/\operatorname{Ker} f \simeq \operatorname{Im} f$ (Ker f は V の R 部分加群であった)

6 商集合の演算は well-defined (例:商環)

 $[x] = [x'] \iff x \equiv x' \pmod{I}$ より、 $a \equiv b \pmod{I}$ 、 $c \equiv d \pmod{I}$ なる (a,b,c,d) を考える。

6.1 加法 $+: R/I \times R/I \to R/I, ([x], [y]) \mapsto [x+y]$ $a+c \equiv b+d \pmod{I}$ を示す。

 $a-b,c-d\in I$ かつイデアルは加法に関して閉じている ので、 $(a+c)-(b+d)=(a-b)+(c-d)\in I$ である。

6.2 乗法 \times : $R/I \times R/I \to R/I$, $([x], [y]) \mapsto [x \cdot y]$

 $a \cdot c \equiv b \cdot d \pmod{I}$ を示す。

 $a-b,c-d\in I$ かつイデアルは加法・定数倍に関して閉じているので、 $(a\times c)-(b\times d)=(a-b)\times c+b\times (c-d)\in I$ である。

7 商集合は代数系をなす

先ほどの well-defined な演算に基づき、公理を確認

8 商集合への自然な射影 π は準同型

- $\pi(xy) = [xy] = [x][y] = \pi(x)\pi(y)$
- $\pi(e) = [e]$

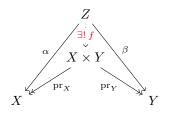
直積

1 直積集合は代数系をなす

公理を確認すればよい。

2 直積集合 $X \times Y$ の普遍性

任意の集合 Z と任意の写像 $\alpha\colon Z\to X, \beta\colon Z\to Y$ について, $\alpha=\operatorname{pr}_X\circ f$ かつ $\beta=\operatorname{pr}_Y\circ f$ となるただ 1 つの写像 $f\colon Z\to X\times Y$ が存在する。



2.1 証明

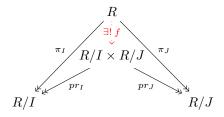
図式が可換になるようにするには、 $\forall z \in Z, f(z) = (\alpha(z), \beta(z))$ でなければならないから、存在すればただつっ。これは確かに存在する。

2.2 系

2.2.1 直積環の普遍性 [2-p.102 2.4.24]

任意の可換環 Z と任意の環準同型写像 $\alpha\colon Z\to X, \beta\colon Z\to Y$ について、 $\alpha=\operatorname{pr}_X\circ f$ かつ $\beta=\operatorname{pr}_Y\circ f$ となるただ 1 つの環準同型写像 $f\colon Z\to X\times Y$ が存在する。 2.2.2 中国剰余定理 (n=2) [2-p.32 1.6.2]

 $\pi_I\colon R\to R/I,\,\pi_J\colon R\to R/J$ はともに環準同型だから、 普遍性より、 $f\colon R\to R/I\times R/J$ は環準同型。



 $I \cap J = \operatorname{Ker} f$ である。加えて、I, J が互いに素であることより $R/I \times R/J = \operatorname{Im} f$ である。

よって、準同型定理より $\overline{f}\colon R/(I\cap J)\to R/I\times R/J$ は 全単射な環準同型写像であり、 $R/(I\cap J)\simeq R/I\times R/J$ である。

$$R \xrightarrow{p} R/(I \cap J) = R/\operatorname{Ker} f$$

$$f \xrightarrow{g} \overline{f}$$

$$R/I \times R/J = \operatorname{Im} f$$

 $I\cap J=IJ$ なので、 $R/IJ\simeq R/I\times R/J$ (中国剰余定理)である。